# 女性がど真ん中で輝くJAに

**菅野孝志**

ＪＡ教育文化活動専門講師　ＪＡ全中 前副会長理事

かんの・たかし／1952年福島県生まれ。1972年旧松川町農協入組、1990年参事。2004年ＪＡ新ふくしま常務理事（営農経済担当）、2007年代表理事理事長。2013年代表理事組合長、2016年ＪＡふくしま未来代表理事組合長、2019年ＪＡ福島五連会長。2020年ＪＡ全中副会長理事に就任、2023年退任。

**協同組合は人が主役であり、ＪＡの組織・事業基盤の確立のためには、「協同組合としての役割発揮を支える人づくり」が欠かせない。菅野さんは、多様な人材を育成し、とりわけ女性の力を生かしていくことが、転換期における新たなＪＡづくりにつながっていくと語る。**

## 男女を隔てない学びと実践を

わたしにとっての学び舎は、協同組合科がある福島県農業短期大学校だった。農協や生協が地域社会の一員として、よりよい地域づくりに参画していることに、多くの感銘を受けた。その学びは、地域と組合員と多くの地域の方々とつながり、みんなが幸せになる社会を創ることにあった。

入組して１年目。指導課に配属されて、青年組織を担当した。農業青年と昼夜を問わず語り合い、ともに活動してきた。

県内の「青年の集い」が一泊二日で開催されたときのこと。開催前にみんなと話し合い、多くの仲間と夜更けまで語り合いたいという思いから、大部屋での共同宿泊を提案した。共同宿泊は、所管する機関からこっぴどく怒られたが、われらの責任でやると決断し、強行。大きくて広い養蚕室の２階を男女別に敷布カー

テンで仕切り、夜更けまで語り合った。朝６時には全員でラジオ体操をし、「君は川流を汲め　われは薪を拾わん……」の詩のように、男女が協力し合ってご飯を炊き、味噌汁を作り、朝食をともにした。女性がみんな参加したことは嬉しかった。女性たちの考えや行動力に感服した。別れ際、涙する者もいた。自主規範をみんなで作り、性別などに関係なく、自由闊達に意見交換することの大切さを感じたことが、懐かしい思い出となっている。

## 声なき声を感じとること

１988年の農協総会のことも印象に残っている。女性たちによる意思決定について、印象に残っている出来事がある。

食の安全・安心の店舗としてＡコープの出店計画を作り、総会前に議案説明などを含め座談会を50か所で開催し結果、約600人が出席した。しかし、総会では男性の反対意見が続出。粘り強く説明し、理解を求めた。総会出席者約700名のうち４分の３は女性だが、女性からの賛否の発言はなく、心配そうに見守っているように見えた。

議論も尽きたと思われたとき、農協青年連盟委員長が「計画の全容はほぼ理解したので、総会後に再度詳細を説明する座談会を開催することを条件に賛成する」と発言。採決後、議長の「大多数の賛成を以て可決決定した」の言葉に、満場の拍手が会場に響きわたった。その多くは女性であった。農協組織における女性の声を聴くこと、声なき声を感じとることが、いかに大切であるかを痛感した。

社会活動家の賀川豊彦の名が刻まれた草津温泉の欄干にて

## 女性が一丸となったパワー

振り返ると、事を起こすときには女性たちがいた。ＪＡ本店直売所設置が共選場の跡地に実現したことも女性たちが先頭を切った。春先のモモの摘蕾指導会にも参加者の約60％が女性だった。

東日本大震災の被災直後の炊き出しも、真っ先に女性部メンバーが快く引き受けてくれた。早朝４時に集まって2,000人分4,000個のおにぎりを作り、温かいうちに避難所に届けた。25日間延べ800人の女性たちが、計100,000個を超えるおにぎりに、復興への思いを託したのだ。

ＪＡは今、組織・事業・経営のさまざまな課題を抱えている。なかでも、組合員主体の組織活動を展開するには、職員の人員体制や人材育成、意識醸成が必要になってくる。コロナ禍の約３年間、活発な活動ができなかった。また、教育文化活動や女性部などの多くの組織活動を、ＪＡがお膳立てしすぎて自主・自立の組織人を育むことが十分できなかった面もある。コロナ禍が明けて、いざ活動を再開させても、さらに活発になったと感じているトップは数少ない。

組織ごと世代ごとに、あらゆる方策を検討し、ともに考え行動する道筋を再構築する必要がある。ＪＡの事業総利益の減少が続くなか、事業管理費（コスト）の削減によって事業利益が増加している構造に満足してはならない。つねに事業総利益が増加もしくは維持する施策を打ち出し、組合員と役職員が総力戦で挑戦を繰り返すことが重要である。そのためにも、未来協働カンパニーとしてのＪＡが多様な人材による力を発揮し、新たな一歩を踏み出してほしい。

ＪＡの活動や事業は、女性がど真ん中で担っている。女性たちの器用さや粘り強さが食・農・いのちの現場となる最前線で、さらに生かされることを願う。